

ドイツ軍政下セルビアにおける抵抗運動対策・治安維持策の展開 (1941～1944年)

—報復政策を中心に—

若 林 美佐知*

Measures to Put Down Resistance and to Uphold Law and Order in Serbia under the German Military Occupation, 1941–1944

WAKABAYASHI Misachi

abstract

Während des Zweiten Weltkrieges stand Serbien vom April 1941 bis Oktober 1944 unter deutscher Besetzung. Ziel des vorhandenen Aufsatzes ist die Schilderung der Maßnahmen, die die deutsche Besatzungsmacht in Serbien zur Widerstandsbekämpfung bzw. zur Aufrechterhaltung von Ruhe und Ordnung traf, sowie der Verhältnisse, unter denen ein der deutschen Herrschaft unterworfenes Volk leben musste. Zur Widerstandsbekämpfung bzw. zur Aufrechterhaltung von Ruhe und Ordnung in Serbien wurden u. a. die sogenannten “Sühnemaßnahmen” getroffen. Viele Menschen wurden als Geiseln festgenommen und als “Sühne” für die Verluste der Okkupanten durch die Aktionen der Widerstandskämpfer ermordet.

Eines der Kriegsziele des NS-Regimes war die Vernichtung des Bolschewismus. Die serbischen Kollaborateure, die im allgemeinen nicht nur national, sondern auch antikommunistisch waren, sollten daher für die Zwecke der deutschen Besatzungsmacht instrumentalisiert werden.

Es gab einige Faktoren, die die Haltung der Deutschen den Serben gegenüber bestimmten. Zuerst erzielten die Sühnemaßnahmen eine erhoffte Wirkung: die serbische Bevölkerung wurde durch die Sühnemaßnahmen eingeschüchtert, sodass sie sich gegen die Widerstandskämpfer ablehnend verhielt. Außerdem hatten die Deutschen Vorurteile gegen das serbische Volk und Angst vor dem serbischen Nationalismus. Diese Faktoren führten zur kompromisslos harten Haltung der deutschen Besatzungsmacht der serbischen Bevölkerung gegenüber.

Key words : Nazi Germany, World War II, Occupation policy, Serbia, War crimes

はじめに

戦時の死者は、戦場での軍隊同士の戦闘がもたらすだけではない。第二次世界大戦(1939～1945年)では、ヨーロッパの無数の民間人が、ナチ・ドイツの占領政策によって生命を奪われた。その際特徴的だったのは、東欧と西欧とで市民の扱いに相違が見られ、ロシアやポーランドでは殺害、追放、強制労働への拉致などが大規模に且つ容赦なく行われたことである。その理由として、「生存圏 (Lebensraum)」としての「東方」の獲得と「ユダヤ的ポリシェヴィズム」の撲滅がドイツの主要な戦争目的だったことと、スラヴ民族を「劣等」と見なす人種主

キーワード：ナチ・ドイツ、第二次世界大戦、占領政策、セルビア、戦争犯罪

*平成8年度生 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科研究院研究員 比較社会文化学専攻

義が反映したことがあげられる。

1941年4月から1944年10月までドイツ軍政下にあったセルビアでも、多数の市民が殺害された。とりわけ報復政策（Sühnemaßnahmen）が多くの犠牲をもたらした。報復政策は、占領者への敵対行為がなされた場合に、人質として捕えておいた民間人を殺害するという抵抗運動対策ないし治安維持策で、ドイツ占領下の各地で導入されていた。中でもユーゴスラヴィアとギリシアで異常に多数の市民が犠牲にされたことが問題となり、戦後ニュルンベルク継続裁判「第7号事件」として、ドイツ軍の将官12名が起訴され、そのうち8名が有罪になった¹。

本稿では、ドイツ軍政下セルビアでの報復政策を中心とする抵抗運動対策・治安維持策の展開をたどり、市民に対する苛酷な政策を推し進めた要因について考えてみたい。

1 ユーゴスラヴィア攻撃と戦後処理

1941年3月27日ベルリンに、この日ユーゴスラヴィアの首都ベオグラードでクーデタが起きたという報告がもたらされた。このクーデタは、3月25日のユーゴスラヴィアの三国同盟（日本、ドイツ、イタリアの間で1940年9月27日成立）加盟に反対する空軍将校らが中心になって起こしたものである。ヒトラーはこの報告を受けるとすぐに、「命令第25号」によってユーゴスラヴィア攻撃を命じ²、ドイツ軍は4月6日ユーゴスラヴィアに攻め込んだ。

ドイツがユーゴスラヴィアを自らの勢力圏に入れようとしたのは、戦争遂行のため経済的、戦略的に必要だったからである。ユーゴスラヴィアは、経済的にはボーキサイトやクロムなど軍需産業に不可欠の地下資源を提供し³、戦略的には対ソ戦の際他の東欧諸国とともに補給基地として機能することになっていた⁴。

1941年4月6日から7日にかけて、ベオグラードは激しい空襲を受けた。この空襲で「どれほどの民間人が犠牲になったか、確たる数字をあげることはできない。死者の数は、報告によって1500と3万の間を上下している。空襲後数日間の混乱した状況のために、おそらく誰も、負傷者、行方不明者および死者の数を正確に把握することができなかったのである」⁵。

1941年4月17日のユーゴスラヴィア軍無条件降伏に続いて、ドイツとその同盟諸国によるユーゴスラヴィア領の分割がなされた。クロアチアはボスニア・ヘルツェゴヴィナを合わせて「独立」した。イタリア、アルバニア、ブルガリア、ハンガリーにはそれぞれ隣接地域が割譲され、ドイツもスロヴェニアの北部と西部を併合した。セルビアとバナートはドイツ軍政府による直接占領下に置かれた⁶。ただし、実際の行政事務はセルビア人の政府と行政機関が執り行った。

ドイツがユーゴスラヴィアを解体し、最小限の領域のみを直接軍政下に置いた理由のひとつに、対ソ戦を目前に控えたドイツ軍には、ユーゴスラヴィアないしセルビア占領に割ける十分な兵力がないという事情があった⁷。実際、占領のためセルビアに派遣されたドイツ軍（当初第704、第714、第717の歩兵3個師団）は、将兵の人数、年齢、訓練の点で戦闘能力に欠けていた⁸。

2 セルビアにおける抵抗運動対策・治安維持策の展開

(1) 報復政策と抵抗勢力掃討作戦

1941年6月22日の独ソ戦開始をきっかけに、ユーゴスラヴィア共産党が指導する抵抗運動が7月以降セルビア全域に広がった。この事態に対処するため、9月半ば以降ドイツ軍は大規模な抵抗勢力掃討作戦とともに、報復政策を精力的に遂行した。その結果、10月から12月までの期間だけで2万5千名以上が殺害されたと推定されている⁹。

抵抗運動に対して住民から人質をとり断固とした手段で臨むという方針は、既にユーゴスラヴィア攻撃開始後間もなく出されていた¹⁰。1941年4月28日には、ドイツ軍将兵が襲撃された場合、人質として捕えておいた住民を処刑するようとの命令が出された¹¹。それに先立って、4月22日セルビアで最初の報復処刑が執行された。狙撃によるSS師団の兵士1名の死亡および1名の負傷に対して、パンチェヴォ（Pančevo）で市民18名が絞首

刑に、18名が銃殺刑に処されたのがそれである¹²。4月21日には、狙撃によりドイツ軍将校1名が死亡し将校と下士官各1名が負傷したことの報復として、ひとつの村が焼き払われた¹³。

1941年夏、抵抗運動の活発化に伴って報復殺害が頻繁になっていく。民間人の殺害がどのように行われたか、その一例をあげてみよう。7月27日セルビア北西部で、警察部隊の下士官1名が死亡し1名が行方不明になる襲撃事件が起きた。するとその翌日、襲撃現場近くの村落や田畑から合計81名の男性住民が手当たり次第に駆り集められて銃殺されたのである¹⁴。

処刑の際最初に選び出されたのは、大抵の場合「共産主義者とユダヤ人」で、1941年8月末までにおよそ1000名の「共産主義者とユダヤ人」が殺害された¹⁵。

1941年秋、「償いの比率 (Sühnequote)」が定められたことにより、犠牲者の数は飛躍的に増加した。抵抗勢力に対してドイツ軍が大々的に反撃に出るにあたり、国防軍統合司令部 (Oberkommando der Wehrmacht) 長官カイテル (Wilhelm Keitel) の9月16日の命令¹⁶を受けて、10月10日セルビア全権軍司令官 (Bevollmächtigter Kommandierender General in Serbien) ベーメ (Franz Böhme) が、ドイツ (軍) 人1名死亡に対して100名を、1名負傷に対して50名を処刑するよう命令を出した¹⁷ので、10月以降ほぼこの比率に従った人数が殺害されるようになった。

中でも、セルビア中部のクラリエヴォ (Kraljevo) とクラグエヴァツ (Kragujevac) での大虐殺が悪名高い。クラリエヴォでは、抵抗勢力との戦闘でドイツ軍に死者5名と負傷者20名が出ると、10月16日住民1755名が銃殺された¹⁸。100人一組で処刑場所へ連行された犠牲者は、あらかじめ掘られていた穴の前に立たされ、機関銃で撃たれた。死にきれなかった人には、穴の中に降りて行ったドイツ兵が、至近距離から撃つてとどめを刺した¹⁹。クラグエヴァツでは、ドイツ軍の死者10名と負傷者26名に対し、10月19日から21日にかけて「共産主義者とユダヤ人」をはじめとする合計2300名の住民が殺害された。これらの犠牲者は、ドイツ軍が住居、職場、路上で手当たり次第に逮捕した人々である²⁰。

報復政策は、セルビアにおける「ユダヤ人問題の解決」にもつながった。ドイツ軍政府は抵抗運動の黒幕をユダヤ人であると見なし、ユダヤ人と共産主義者を同一視していた²¹。ベーメの1941年10月10日の命令には「総てのユダヤ人」を人質として捕えるよう明記され、これによって報復政策とユダヤ人絶滅政策が公然と結びつけられた。

それに先立って1941年10月4日ベーメは、ドイツ兵21名の殺害に対し「ユダヤ人と共産主義者」を優先的に選り出して、2100名を銃殺するようとの命令を出していた²²。また9月末のセルビア西部ヴァリエヴォ (Valjevo) でのドイツ兵10名殺害と24名負傷への報復として、10月19日セルビア人2200名の銃殺が命じられたが、これについては、実際はおよそ600名のユダヤ人とロマが銃殺されたことが報告されている²³。こうしたことの結果、セルビアのユダヤ人男性は1941年末までにほぼ全員が殺害されてしまった。

抵抗勢力の主力部隊も、1941年末までにセルビア領外へ撤退した。秋の掃討作戦の際、抵抗勢力はドイツ軍との衝突を避ける戦法をとり、逮捕、強制連行、強制収容所送り、強制労働、虐待、殺害、村落の破壊などによって甚大な被害を受けたのは市民だった。

1941年9月下旬のセルビア北西部シャバツ (Šabac) 攻撃の際には、この町の14歳から70歳までの全男性住民を捕えて強制収容所に入れることが命じられた²⁴。

これに引き続きセルビア北西部のサヴァ (Sava) 川・ドリナ (Drina) 川三角洲地帯で10月上旬まで行われた作戦の際には、15歳から60歳までの全男性住民を逮捕して強制収容所に入れ、後日強制労働に送ること、女性は全員すぐに強制労働に送ることなどが命じられた。ドイツ軍政府はこの地域について、抵抗運動の補給基地として機能しており、女性と子供までがスパイとして抵抗運動に加担していると思なしていた²⁵。

10月下旬の「ヴァリエヴォ作戦」では、抵抗勢力に宿泊場所や食糧を提供しているという理由で、ヴァリエヴォ周辺の総ての村落を焼き払うことが命じられたが、敵対的な行動に出ない限り住民には配慮するようにと付け加えられてもいた²⁶。

(2) 市民に対する威嚇と監視の体制

1941年12月以降、セルビア情勢は鎮静化に向かった。12月上旬ベーメに代わってセルビア全権軍司令官に就

任したバーダー（Paul Bader）は、セルビアの抵抗運動を迅速に且つ首尾よく鎮圧するのに貢献したとして、報復政策の有効性を高く評価し、その継続を命じた²⁷。ただし「償いの比率」については、12月5日付で、それまでの規定から半減し、死者1名に対して50名、負傷者1名に対して25名を処刑するという比率に変更されていた²⁸。

1941年秋の大虐殺の後も1942年3月まで報復処刑は何度か執行され、そのたびに少なからぬ人々が犠牲になった。3月半ばには、報復政策がセルビア市民を畏縮させ、彼らの抵抗の意志を挫くのに効果的であることが明らかになっていた²⁹。その後3月下旬から10月まで、報復処刑が報告されたのは6月の一度³⁰だけであるが、その間も1000名単位の「償いのための虜囚（Sühnegefangene）」と100名単位の「人質（Geiseln）」が常時収容所に確保されていた。「償いのための虜囚」は、共産主義者などイデオロギー上ナチが敵視した人々である。一方「人質」は一般市民で、地域社会を構成する全階層からとられ、一定期間ごとに交換された。居住地域における抵抗運動阻止と治安維持について、住民全体に連帯責任を持たせるという意図からである³¹。

1942年3月まで残存抵抗勢力に対する追撃戦と掃討戦も継続された後、この年の夏が終わるまで、セルビアではほぼ半年にわたって小康状態が保たれた。この時期にもドイツ軍は、セルビア人部隊、亡命ロシア人部隊、1941年末セルビアに派遣されて来たブルガリア軍とともに、パトロール、偵察、手入れなどの治安維持活動に休みなく従事していた。

1942年6月にはセルビア占領ドイツ軍の一部がボスニアでのバルチザン戦争に投入されたので、絶え間ないパトロール活動にはドイツ軍の弱体化をごまかすという目論見もあった。事実、「ドイツ軍部隊が自分の駐屯地の外にしばしば姿を見せることで、実際よりも多くの占領軍が存在するかのような印象が生じ」た³²。また、住民に圧力をかけて常に監視されているという実感を与えるため、夜間パトロールを頻繁に実施する、遠隔地にも小隊または中隊規模の機械化部隊を送る、警察官とSS隊員の制服を警察やSSが本来駐在していない地域でも目につくようにするなどの示威活動が命じられた³³。

このような軍隊による威嚇に加えて、1942年夏、市民を対象とする諜報網の整備と監視の強化がなされた。町中に放たれたセルビア人諜報員が情報を収集し、市場、旅館、病院、映画館、劇場、駅など人が多く集まる公共の場所、人の出入りが多い民家、通話内容、外国ラジオ放送の受信状況、セルビア語の著作物、新聞、雑誌、ポスターなどが監視と盗聴の対象となった。夜間、外にいる者は調査対象とされた。ドイツ兵がセルビア人と交際することは禁止され、ドイツ軍の兵舎で働くセルビア人や通訳も常に監視されていた³⁴。

市民に対する威嚇と監視が1942年の平穏な時期にも維持ないし強化されたのは、共産党ではなくセルビア民族主義者の抵抗運動に市民が加担するのを防ぐためだった³⁵。

ドイツ軍政府は、共産党の抵抗運動について、セルビアでは1942年春の時点でほぼ排除され、セルビア人はこれを支持していないばかりか、バルチザン戦争がもたらした多大な損害と犠牲に疲弊して、共産主義に敵対的になっている、むしろドイツ軍に、治安と秩序を維持しバルチザンによる襲撃と略奪から市民を守るという役割を期待していると判断していた。市民が共産党員の処刑に参加することさえあった³⁶。

それに対して、元ユーゴスラヴィア軍大佐ミハイロヴィチ（Draža Mihailović）をリーダーとするセルビア民族主義者（ミハイロヴィチ・チェトニク）は、セルビア人の絶大な支持だけでなく、北アフリカで枢軸軍と対峙中のイギリスからも援助を得ていた。その見返りとして、イギリスはミハイロヴィチに、北アフリカへの補給の拠点としてドイツにとって戦略的に重要なセルビアで、ベオグラードと南東部のニシュ（Niš）を結ぶ鉄道の破壊活動を行うことなどを要請した³⁷。

(3) 報復政策の強化と日常化

1942年秋、ドイツ軍がミハイロヴィチ・チェトニクに攻勢をかけたことから、セルビア情勢は再び騒然となった。1941年秋と同じように、多くの民間人がドイツ軍の軍事作戦に巻き込まれた。9月下旬から10月にかけて、セルビア中部から南部にまたがるコパオニク（Kopaonik）山地で遂行された作戦の際には、およそ300名にのぼる市民が殺害され、それに加えて、コパオニク山中のゴチュ（Goč）近郊で焼き払われたある村には250の焼け焦げた遺体が残された³⁸。

一方ミハイロヴィチは、市民が報復政策の犠牲になるのを恐れて、セルビアで破壊活動を実行するようとい

ウイギリスの要請に、実のところなかなか応じようとしなかった。ドイツ軍を標的とした破壊活動は「報復」を招くので、ミハイロヴィチ・チェトニクは1942年11月、主にドイツ軍政府に協力しているセルビア人の市長や官吏を襲撃するようになった³⁹。これに対して、ドイツ軍政府は即座に報復政策を強化した。1942年11月21日の公示により、ドイツ人の死傷や行方不明の場合だけでなく、セルビア人官吏の死傷や拉致の場合にも、また人的被害だけでなく施設破壊の場合にも、「報復」が適用されることになった⁴⁰。

その結果、1942年12月以降報復処刑の件数は目に見えて増加し、1943年になると連日のように執行されるようになった。1943年2月28日、「報復」の対象になるのは、ドイツ人、民族ドイツ人 (Volksdeutsche)、ブルガリア兵、セルビア人官吏、セルビア兵の死傷ならびに戦争遂行のため重要な施設、殊に交通、通信、産業施設の破壊であること、「償いの比率」については、ドイツ人およびブルガリア人殺害の場合は50名、同じく負傷の場合は25名、セルビア人殺害の場合は10名、同じく負傷の場合は5名、そして施設襲撃の場合は最高100名までを処刑することと、改めて規定された⁴¹。また同日、報復処刑が速やかに執行されるように、収容所を増設し、常時少なくとも虜囚50名ずつを確保しておくようにという指示も出された⁴²が、2月はじめに兆候が現われ始めた人質不足は解消されることなく、悪化するばかりだった。そこで場合によっては、最後の手段ではあるが、「人質調達」を目的とする特別作戦も許可されることになった。例えば、ルニコヴァツ (Runjikovac) 村が共産党に襲撃されてドイツ兵2名が殺害され2名が負傷した際、共産主義者150名の銃殺が命じられただけでなく、処刑されるべき虜囚の不足分をルニコヴァツ村の住民で補うための作戦が同時に許可された⁴³。

1943年は、戦況がドイツにとって決定的に不利になった年である。2月2日スターリングラードのドイツ軍第6軍が、5月13日北アフリカのドイツ・イタリア軍が降伏した。引続き連合軍は北アフリカからイタリア領に向けて進撃し、9月3日イタリア本土に上陸、同8日にはイタリアの無条件降伏が公表された。するとセルビアでは、連合軍のバルカン半島上陸を期待して、ミハイロヴィチ・チェトニクが全域で攻勢に転じ、鉄道襲撃などを活発に行うようになった⁴⁴ので、鉄道警備の強化に市民も動員された。彼らはしばしばドイツ兵によって走行中の列車から銃撃された⁴⁵。鉄道襲撃が行われると、警備を任されていた市民が報復として銃殺されることもあった⁴⁶。東部戦線ではソ連軍が西進し、クロアチアではチトー (Tito) が勢力拡大を続けていた。

このような戦況悪化に対処するため、セルビア占領政策の再検討が必要になり、報復政策も見直された。1943年12月、共産主義との戦いを優先するという基本方針に沿って、ミハイロヴィチ・チェトニクと妥協を図るために、セルビア民族主義者は報復措置の対象から外されることになった⁴⁷。報復命令が出され、あるいは実施される件数そのものも、1943年12月から1944年5月までは月1件程度になった。ただし1944年4月25日、ドイツ兵1名の拉致と殺害に対する報復としてミハイロヴィチ支持者50名の銃殺が命じられた⁴⁸のは、この頃にはミハイロヴィチ・チェトニクとの提携の試みが挫折していたことを示している。

1944年春、セルビアは連合軍の制空圏に入った。4月16日と17日の二日にわたるベオグラード空襲の際には、合わせて1160名の市民が死亡した⁴⁹。

3 ドイツのセルビア人観

ヨーロッパ各地でドイツが遂行した戦争や占領の方法に影響を与えたさまざまな要因には、支配下に置いた諸民族それぞれの民族性についての先入観や偏見も数えられる。

例えば、1940年4月のデンマーク侵攻に先立って、司令官フォン・ファルケンホルスト (Nikolaus von Falkenhorst) はドイツ軍将兵に、デンマーク人がスカンジナビア諸民族と血縁関係にあると自負していることや、自由を愛し強制や従属を嫌う気質であることにも留意して、それ相応に接するようにと指示していた⁵⁰。

一方ユーゴスラヴィア攻撃の場合、司令官フォン・ヴァイクス (Maximilian von Weichs) は、「セルビア市民は、陰険なやり方で奇襲や妨害を実行することによって、ドイツ軍に対する戦いに参加するだろう」と予想した上で、「あらゆる暴力行為と妨害行為には、最も厳しい方法で断固として立ち向かわなければならない」と命じていた⁵¹。

セルビア人の民族性については、1941年夏から秋にかけて抵抗運動がセルビア全域に広がる中で、つぎのような報告がなされている。

セルビア人の民族性は、頑固さ、勘違いしたロマン主義、一族の結束、同族経営、そして腐敗が混合したものという点でいささか特殊であり、ひどく感情的な思考と行動を見れば、啓蒙という方法では対処できない⁵²。

ここで言われていることをまとめてみると、ドイツ軍政府はセルビア人を前近代的で血の気が多く御し難いと評価し、「啓蒙」ではなく「暴力」という方法で対処したのだろう。

報復政策実施に関する1941年10月10日の命令の中には、「セルビアでは『バルカン・メンタリティ（Balkanmentalität）』ならびに共産主義および偽装された民族主義の反乱の広がりゆえに、国防軍統合司令部の命令を最も厳格な形で実行しなければならない⁵³と記されている。この「バルカン・メンタリティ」は、19世紀にオスマン帝国に対する独立運動の中で、セルビアやギリシアで形成されてきた民族主義を連想させる。

実際、セルビア人の支持を集めていたのは、セルビア民族主義者ミハイロヴィチと彼が率いる抵抗運動である。ミハイロヴィチ・チェトニクは、大セルビア国家の建設という政治目標と反共産主義の姿勢⁵⁴によって、セルビア人の支持を得ていた。そこで、反共産主義という点でドイツと一致していることに着目し、セルビア人協力者の要望にも応じながら占領統治を円滑に行おうという選択肢は、占領初期からドイツ軍政府内部に存在した。だが、占領末期に試みられたミハイロヴィチとの提携は、セルビア民族主義そのものを脅威と見なすヒトラーによって、最終的に退けられた。ヒトラーの見解では、

セルビア人は、国家を建設し維持していく能力のある民族である。彼らの内には、何物にも屈しない抵抗力が潜んでいる。…もし我々の方からセルビア人の申し出に応じ、彼らに武器と弾薬を提供したとすれば、彼らはチトーに対する戦いに勝利をおさめるだろう。だが私は、そうなればすぐに大セルビア主義の理想が再び燃え上がり、我々の不利になるだろうとも確信している。こうした事態は耐え難い。セルビア人は、大セルビア主義の理想を放棄することは決してないだろう⁵⁵。

セルビア市民大量殺害の原動力は復讐心、とりわけオーストリア人の復讐心だったという見解もある。ベームは、1941年秋の抵抗勢力掃討作戦にあたって、1941年3月27日のクーデタおよび1941年夏の抵抗運動だけでなく、セルビア人によるオーストリア皇位継承者の暗殺がその契機となり、ドイツとオーストリアの敗北と帝政の崩壊に終わった第一次世界大戦のために復讐するようにと、ドイツ兵の士気を鼓舞した⁵⁶。ベームや、1941年秋フランスから移動して来て主力として抵抗勢力掃討作戦を遂行した第342歩兵師団長ヒングホファー（Walter Hinghofer）など、セルビアやバルカン地域に派遣された司令官には、オーストリア人の割合が大きかった⁵⁷。セルビア駐留の第717歩兵師団は「オストマルク」の第17軍管区で編制され、将兵の半数以上をオーストリア人が占めていた⁵⁸。

おわりに

第二次世界大戦当時、民間人を人質にし、占領者に対して敵対行為がなされた時に報復として殺害するというやり方は、一定の条件下では国際法に違反するものではなかった。ニュルンベルク継続裁判「第7号事件」において戦争犯罪であり国際法違反であると判断されたのは、抵抗運動と関わりのない人々が異常に高い「比率」で処刑された点である⁵⁹。セルビア占領ドイツ軍政府がこのような苛酷な報復政策を推し進めた要因について、まとめてみよう。

1941年の段階では、反ユダヤ主義と反共産主義というナチ・イデオロギーの中心的な要素が推進力になっていた。だが1942年以降については、セルビア人が一般的に共産主義に敵対的だったことから、反共産主義を理由とすることはできない。また元々はユーゴスラヴィア征服計画がなかったことから、ロシア人やポーランド人に対するのと同様の反スラヴ主義をセルビア人に当てはめるのも妥当ではない。

ドイツは、排他的で自立を強く志向するセルビア民族主義を警戒していた。報復政策には、市民を抵抗勢力側に追いやり、占領軍に対する彼らの敵対的態度を強めるのではないかという否定的な評価もあった⁶⁰が、大量殺害の経験と記憶には、市民を畏縮させ、抵抗運動に対して拒否的な態度をとらせるという効果があったので、兵力不足を補うことにもなっただろう。この有効性に、セルビア人についてのステレオタイプなイメージとセルビア民族主義に対する警戒心が結びついたことが、報復政策を占領末期に近くなるまで継続したことに繋がった

と考えられる。

註

- 1 *Fall 7. Das Urteil im Geiselmordprozeß gefällt am 19. Februar 1948 vom Militärgerichtshof V der Vereinigten Staaten von Amerika*, hrsg. von Martin Zöller u. Kazimierz Leszczyński, Berlin: VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, 1965.
- 2 *Hitlers Weisungen für die Kriegführung 1939–1945. Dokumente des Oberkommandos der Wehrmacht*, hrsg. von Walther Hubatsch, Frankfurt a. M.: Bernard & Graefe Verlag für Wehrwesen, 1962, S. 106–108, Weisung Nr. 25, 27, 3. 1941.
- 3 *Griff nach Südosteuropa. Neue Dokumente über die Politik des deutschen Imperialismus und Militarismus gegenüber Südosteuropa im zweiten Weltkrieg*, hrsg. von Wolfgang Schumann, Berlin: VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, 1973, S. 10–15.
- 4 *Europa unterm Hakenkreuz. Die Okkupationspolitik des deutschen Faschismus (1938–1945). Achtbändige Dokumentenedition*, hrsg. vom Bundesarchiv, Bd. 6: Die Okkupationspolitik des deutschen Faschismus in Jugoslawien, Griechenland, Albanien, Italien und Ungarn (1941–1945), Berlin / Heidelberg: Hühig Verlagsgemeinschaft, 1992, S. 29.
- 5 Vogel, Detlef, "Operation 'Strafgericht'. Die rücksichtslose Bombardierung Belgrads durch die deutsche Luftwaffe am 6. April 1941", in: *Kriegsverbrechen im 20. Jahrhundert*, hrsg. von Wolfram Wetze u. Gerd R. Ueberschär, Darmstadt: Primus Verlag, 2001, S. 305.
- 6 Sundhaussen, Holm, *Geschichte Jugoslawiens 1918–1980*, Stuttgart / Berlin / Köln / Mainz: Verlag W. Kohlhammer, 1982, S. 113.
- 7 Olshausen, Klaus, *Zwischenspiel auf dem Balkan. Die deutsche Politik gegenüber Jugoslawien und Griechenland von März bis Juli 1941*, Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1973, S. 154–155.
- 8 Bundesarchiv-Militärarchiv (以下BA-MAと略記), RH26-114/3, 714. ID/Ia, Tätigkeitsbericht für 1. Mai–31. Juli 1941.
- 9 Manoschek, Walter, "Serbien ist judenfrei". *Militärische Besatzungspolitik und Judenvernichtung in Serbien 1941/42*, München: R. Oldenbourg Verlag, 1995, S. 186.
- 10 *Europa unterm Hakenkreuz*, Bd. 6 (註4参照), S. 139, Dok. 4: Aus den Besonderen Anordnungen von Generalfeldmarschall Maximilian von Weichs, Oberbefehlshaber der 2. Armee vom 8. April 1941 über die Bekämpfung des Widerstandes der serbischen Bevölkerung.
- 11 Staatsarchiv Nürnberg (以下StA Nürnbergと略記), Nbg. Dok. NOKW-1151, Befehl des OB der 2. Armee, 28. 4. 1941.
- 12 Manoschek, Walter, "Beweisaufnahmen. Pančevo, 22. April 1941", in: *Eine Ausstellung und ihre Folgen. Zur Rezeption der Ausstellung "Vernichtungskrieg. Verbrechen der Wehrmacht 1941 bis 1944"*, hrsg. vom Hamburger Institut für Sozialforschung, Hamburg: Hamburger Edition, 1999, S. 191–195.
- 13 Manoschek, "Serbien ist judenfrei" (註9参照), S. 31.
- 14 StA Nürnberg, Nbg. Dok. NOKW-1661, Bfh. Serbien/Verw. St., Fernschreiben an OKW/ Abt. L., 9. 8. 1941.
- 15 BA-MA, RW40/187, Bfh. Serbien/Verw. St., 5. Lagebericht, 6. 10. 1941.
- 16 BA-MA, RH26-342/11, Chef des OKW/WFSt/Abt. L (IV/ Qu), Kommunistische Aufstandsbewegung in den besetzten Gebieten, 16. 9. 1941.
- 17 BA-MA, RH26-342/13, Bev. Kdr. Gen. in Serbien/III/Chef Mil. V./Qu, Niederwerfung kommunistischer Aufstandsbewegung, 10. 10. 1941.
- 18 BA-MA, RH26-117/3, 717. ID, Tagesmeldungen vom 15. 10. 1941 u. 17. 10. 1941.
- 19 Manoschek, "Serbien ist judenfrei" (註9参照), S. 157.
- 20 BA-MA, RW40/12, KKI/832 an FK 610/Bfh. Serbien/Ia, 20. 10. 1941; RH26-104/16, Bericht über den Einsatz des I./I. R. 724 für die Zeit vom 17. 10.-25. 10. 1941, 27. 10. 1941.
- 21 BA-MA, RW4/v. 231, Bfh. Serbien/Prop.-Abt. "S", Lage- und Tätigkeitsbericht für die Zeit vom 26. 7. Bis 30. 8. 1941, 31. 8. 1941.
- 22 BA-MA, RH24-18/213, Bev. Kdr. Gen. in Serbien/Qu., Sühne für grausame Ermordung deutscher Soldaten durch kommunistische Banden, 4. 10. 1941.
- 23 Manoschek, "Serbien ist judenfrei" (註9参照), S. 96–102.
- 24 BA-MA, RH26-342/11, Bev. Kdr. Gen. in Serbien/Qu, Räumung von Sabac, 23. 9. 1941.
- 25 BA-MA, RW40/20, Bev. Kdr. Gen. in Serbien/Ia, Befehl für die Säuberung des Save-Bogens, 22. 9. 1941.
- 26 BA-MA, RH26-342/14, 342. ID/Ia/op., Div. Befehl für den 24. 10. 41, 23. 10. 1941.
- 27 BA-MA, RW40/14, Anl. 3 zu Bev. Kdr. Gen. in Serbien/Ia, Grundsätzliche Weisungen für den Winter, 20. 12. 1941.

- 28 BA-MA, RW40/14, Bev. Kdr. Gen. in Serbien/Qu. an Verw. St./Ia 22. 12. 1941.
- 29 BA-MA, RH26-114/6, 714. ID/Ic an Kdr. Gen. u. Bfh. in Serbien, Stimmungsbericht, 12. 3.1942.
- 30 BA-MA, RW40/30, Kdr. Gen. u. Bfh. in Serbien/Ia an WB Südost/Dtsch. Gen. in Agram, Tagesmeldungen vom 19. 06. 42 u. 26. 06. 42.
- 31 BA-MA, RW40/14, Anl. 3 zu Bev. Kdr. Gen. in Serbien/Ia, Grundsätzliche Weisungen in Winter, 20. 12. 1941; RW40/30, Kdr. Gen. u. Bfh. in Serbien/Verw. St./Ic, Geiselfestnahme, 21. 6. 1942.
- 32 BA-MA, RH26-114/10, 714. ID, Tätigkeitsbericht für Juli 1942.
- 33 BA-MA, RH26-114/10, 714. ID/Ic, Feindlagebericht für die Zeit vom 15.–31. 7. 42, 2. 8. 1942; RW40/30, Stellv. WB im Südosten u. stellv. OB der 12. Armee/Ia, Besichtigungsbemerkungen anlässlich der Bereisung Serbiens, 17. 6. 1942.
- 34 BA-MA, RH26-114/10, 714. ID/Ic, Tätigkeit der Abwehroffiziere (O. f. A.), 3. 7. 1942.
- 35 セルビア民族主義抵抗運動対策については、拙稿「ナチ体制の政策決定要因をめぐる一考察—ドイツ占領下セルビアにおける抵抗運動対策をてがかりに—」、『現代史研究』、第51号、2005年12月、1～14ページを参照。
- 36 BA-MA, RH26-114/6, 714. ID/Ic, Stimmungsbericht, 12. 3. 1942; RH26-114/7, 714. ID/Ic, Stimmungsbericht, 12. 4. 1942; RH26-114/9, 714. ID/Ic, Stimmungsbericht, 11. 6. 1942.
- 37 Knoll, Hans, *Jugoslawien in Strategie und Politik der Alliierten 1940-1943*, München: R. Oldenbourg Verlag, 1986, S. 501–502.
- 38 *Europa unterm Hakenkreuz*, Bd. 6 (註4参照), S. 213, Dok. 104: Aus einer Aufzeichnung von Felix Benzler vom 19. Oktober 1942 über eine Besprechung mit Milan Nedic, Ministerpräsident der Kollaborationsregierung, zur Ausbeutung und zum Terror in Serbien.
- 39 Politisches Archiv des Auswärtigen Amtes (以下PA-AAと略記), R29664, Benzler an AA, Nr. 1644, 22. 11. 1942; BA-MA, RH26-104/24b, 704. ID/Ia, Säuberungsmassnahmen, 23. 11. 1942.
- 40 BA-MA, RH26-104/29, Kdr. Gen. u. Bfh. in Serbien/Ia, Bekanntmachung, 21. 11.1942.
- 41 BA-MA, RW40/38, Kdr. Gen. u. Bfh. in Serbien/Ia, Sühne durch Tötung von Menschenleben, 28. 2. 1943.
- 42 BA-MA, RW40/38, Kdr. Gen. u. Bfh. in Serbien/Ia, Einrichtung von Lagern für Sühnegefangene, 28. 2. 1943.
- 43 BA-MA, RW40/44, Kdr. Gen. u. Bfh. in Serbien/Ia an FK809, 7. 8. 1943.
- 44 BA-MA, RW40/80, Mbfh. Südost/Ia, Fünftagesmeldung, 15. 9. 1943.
- 45 BA-MA, RW40/81, Mbfh. Südost/Ia, Gefährdung des serb. ziv. Bahnschutzes, 30. 10. 1943.
- 46 BA-MA, RW40/81, Mbfh. Südost/Ia, Sprengung und Ueberfall auf Strecke Belgrad-Nisch zwischen den Bahnhöfen Tesica und Ludzane am 30. 9. 43, 10. 10. 1943.
- 47 BA-MA, RW40/89, OB Südost/Ia/F, Sühnemassnahmen, 22. 12. 1943.
- 48 BA-MA, RW40/87, Mbfh. Südost/Ia an HSSPF, 25. 4. 1944.
- 49 BA-MA, RW40/87, Mbfh. Südost/Ia, Lagebericht für die Zeit vom 16. 3.–15. 4. 1944, 22. 4. 1944.
- 50 *Europa unterm Hakenkreuz. Die Okkupationspolitik des deutschen Faschismus (1938–1945). Achtbändige Dokumentenedition*, hrsg. vom Bundesarchiv, Bd. 7: Die Okkupationspolitik des deutschen Faschismus in Dänemark und Norwegen (1940–1945), Berlin / Heidelberg: Hüthig Verlagsgemeinschaft, 1992, S. 76, Dok. 2: Richtlinien des Befehlshabers der Invasionstruppen General der Infanterie Nikolaus v. Falkenhorst vom 13. März 1940 für das Verhalten gegenüber der Bevölkerung Dänemarks.
- 51 *Europa unterm Hakenkreuz*, Bd. 6, S. 139, Dok. 4 (註10参照) .
- 52 BA-MA, RW4/v. 231, Bfh. Serbien/Prop.-Abt. "S", Lage- und Tätigkeitsbericht für die Zeit vom 31. 8. bis 30. 9. 1941, 1. 10. 1941.
- 53 BA-MA, RH26-342/13, Bev. Kdr. Gen. in Serbien/III/Chef Mil. V./Qu, Niederwerfung kommunistischer Aufstandsbewegung, 10. 10. 1941.
- 54 拙稿「ナチ体制の政策決定要因をめぐる一考察」(註35参照)、6ページ。
- 55 BA-MA, RH19-XI/18, Aktennotiz zum Vortrag des Oberbefehlshabers Südost, Herrn Generalfeldmarschall Frhr. von Weichs beim Führer am 22. 8. 1944 (17. 45–20, 00 Uhr) .
- 56 BA-MA, RH26-342/11, Verfügung Böhmes, 25. 9. 1941.
- 57 Manoschek, Walter, "Opfer, Helden, Kriegsverbrecher? Österreichische Wehrmachtsgeneräle auf dem Balkan", in: *Österreichische Zeitschrift für Geschichtswissenschaften*, 5. Jg./Heft 1 (1994), S. 54–77.
- 58 Manoschek, "Serbien ist judenfrei" (註9参照), S. 29–30.
- 59 「第7号事件」が戦時国際法を改正するきっかけになり、1949年のジュネーヴ協定で、人質をとることは無条件で禁止された (Ihme-Tuchel, Beate, "Fall 7: Der Prozeß gegen die 'Südost-Generale' (gegen Wilhelm List und andere)", in: *Der Nationalsozialismus vor Gericht. Die alliierten Prozesse gegen Kriegsverbrecher und Soldaten 1943–1952*, hrsg. von Gerd R. Ueberschär, Frankfurt a. M.:

Fischer Taschenbuch Verlag, 1999, S. 152)。

60 PA-AA, R29663, Benzler an AA, Nr.446, 1. 8. 1941; BA-MA, RW40/12, KKI/832 an FK610/Bfh. Serbien/Ia, 20. 10. 1941.